

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成24年8月23日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻井昭雄様

所属部局・研究科 霊長類研究所

職名・学年 特定助教

氏名 松田一希

| | | |
|------------|--|----------------|
| 助成の種類 | 平成24年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成 | |
| 研究集会名 | 第14回国際霊長類学会大会 | |
| 発表題目 | コロブス亜科におけるメスの移籍様式がメスの社会関係に与える影響 | |
| 開催場所 | メキシコ・キンタナロー州・カンクン市内の国際会議場 (Cancun Convension Cent | |
| 渡航期間 | 平成24年8月12日 ～ 平成24年8月19日 | |
| 成果の概要 | タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有() | |
| 会計報告 | 交付を受けた助成金額 | 200,000円 |
| | 使用した助成金額 | 200,000円 |
| | 返納すべき助成金額 | 円 |
| | 助成金の使途内訳 | メキシコまでの渡航費と滞在費 |
| 当財団の助成について | (今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 自身の研究成果を世界に発信する機会を与えて頂いたことに、大変感謝しております。ただ、メキシコのカンクン市内は世界屈指の観光地でもあり、助成を受けた金額だけで渡航費、滞在費の全てを賄うことは大変に難しい状況でした。私の場合は、他の研究資金と併用することで、不足分を補いましたが、特に研究資金の少ない学生にとっては、たとえ貴財団より助成を受けることができたとしても、資金不足から出席を取り消さざるを得ない場合もあるのではないかと思います。国などによって一律に助成金額を決めるのではなく、もう少し柔軟に助成金額を決めて頂けると、より利用できる人の層が広がるのではないかと感じました。 | |

成果の概要

霊長類研究所 松田一希

申請者は、2012年8月12～17日にメキシコ・キンタナロー州・カンクン市内で開催された、第14回国際霊長類学会の大会に参加した。国際霊長類学会の大会は2年ごとに開催され、毎回およそ1000人程度の霊長類を研究する学生や研究者らが参加する。本大会においては、開催場所がメキシコであったためか、アメリカ、南米などからの参加者が特に多かったように思われた。一方で、アジアからの参加者は例年に比べると随分と少ないようだった。

申請者は、大会中に企画されたシンポジウム「Flexibility in social relationships in female-dispersal primate species (メスが移籍する霊長類の社会関係の柔軟性)」において、口頭発表を行った。申請者の他には、チンパンジー、ボノボ、ゴリラ、クモザル、ムリキを長年研究している研究者らが、メスの社会性に焦点を当ててそれぞれの発表を行った。申請者の発表は、シンポジウム内最後の発表演題であった。本発表の概要と成果を下記に詳しく記したい。

オナガザル科に属する霊長類種の中には、重層的な社会を形成するユニークな種がいくつかある。重層社会とは、複数の群れがいくつか集まりさらに高次の社会を形成するというものである。重層社会を形成するオナガザル科の共通点は、群れの基本単位がハレム型(単雄複雌)であるという点である。重層社会の種間比較研究の多くは、ハレム型の群れ間の関係性に着目して進められてきた。一方で、ハレム型の群れ内の個体間の関係性に着目した研究例はいままでになかった。そこで本発表では、重層社会を形成する霊長類種(テングザル、キンシコウ、ゲラダヒヒ、マントヒヒ)のハレム群内の個体間の関係性を、メスの移籍パターンに着目して解析して、重層社会形成の共通点を探することを目的とした。

申請者は、コロブス亜科2種(テングザル、キンシコウ)とオナガザル亜科2種(マントヒヒ、ゲラダヒヒ)のハレム群内の個体間の親和交渉(毛づくろいや近接行動)を、ソーシャルネットワーク分析を用いて比較・検討を行った。まず、ハレム群内におけるオスとメスの中心性について検討した。その結果、コロブス亜科とオナガザル亜科では、雌雄の中心性に顕著な違いが見られた。つまり、コロブス亜科の2種では、社会交渉の中心がメスであるのに対して、オナガザル亜科の2種では、オスとその中心となっていることを明らかにした。コロブス亜科の2種とオナガザル亜科のマントヒヒは、双系的な社会(オスもメスも群れを移籍する)を形成する種であり、ゲラダヒヒは母系的な社会(オスのみが群れを移籍する)を形成する種であるため、本結果をメスの移籍様式で説明することは難しい。しかし、オナガザル亜科に比べてより頻繁に報告されている、コロブス亜科のメス間でよく見られる、アロマザリング行動を考慮すると、本結果の解釈は容易である。つまり、群れ内の個体間の中心性が系統によって異なるのは、メスの移籍様式というよりも、コロブス亜科のメスに特徴的な行動である、アロマザリング行動による影響が大きいことが示唆された。

またクラスター指数やクラスター分析の結果から、群れ内の個体間の関係性を考察するためには、メスの移籍様式が重要なカギとなっている点についても言及した。つまり、双系的な社会を形成するコロブス亜科2種とマントヒヒでは、メス間の社会交渉が血縁間に偏らずに様になりやすいため、社会交渉のネットワークが安定しているのだが、母系的社会を形成するゲラダヒヒでは、メス間の交渉が血縁間に偏るために、そのネットワークが不安定になりやすい点を明確に示した。一見すると、重層社会という同一の社会構造を形成する4種だが、最少単位であるハレム群内の個体間関係は、各系統特有の社会交渉(アロマザリング行動)や、雌雄の移籍パターンに影響を受けていることを本発表では主張することが出来た。

シンポジウムには、常時 50 人程度の聴衆がおり、会場からの質問もいくつか受けた。慣れない英語での発表や質疑に緊張したものの、自身の研究を海外に発信する非常によい機会であった。また、シンポジウム終了後に、シンポジウムの企画者とその参加者らが集まり、本シンポジウムの内容をもとに、本の出版を行う旨を話し合った。来年度中には出版され、より多くの人たちに、申請者の研究成果を発信できるであろう。